

[総説・解説]

スクールカースト論からみたいじめ問題の理解と対応

田中 秀和

キーワード：いじめ，スクールカースト，スクールソーシャルワーク

Understanding and Correspondence of the Issue of Bullying Judging From a School Caste Theory

Hidekazu Tanaka

Abstract

About the Issue of Bullying of the Child, I Push Forward a Study From a Viewpoint of the School Caste. It Will Help the Solution to The Problem to Introduce a Viewpoint of The School Caste into The Issue of Bullying. A Bullying Problem is a Problem to Occur at The Point of Contact of a Human Being and the Social Environment and, in This Paper, Develops the Consideration that put Utilization of The School Social Work in The Field of Vision.

Key words : Bullying, School Caste, School Social Work

要旨

今日、いじめ問題は子どもの福祉を考える上で欠かすことのできないものである。いじめについての議論は、以前からなされているものの、根本的な解決には至らず今日に至っている現状がある。

そのような中で、本稿では子どものいじめ問題について、スクールカーストの視点から論考を進めていく。スクールカーストの視点をいじめ問題に導入することは、問題解決の一助になるであろう。またいじめ問題は、人間と社会環境の接点で生じる問題であり本稿では、スクールソーシャルワークの活用を視野に入れた考察を展開した。

I 問題と目的

子どものいじめ問題は昭和末期からメディアを賑わ

せ、社会問題として認識されてきた。その後、今日に至るまでそれは子どもたちの福祉を脅かす存在として、その撲滅が目指されてきた。いじめ問題を解決するために多くの識者が様々な議論を展開してきたが、今日において未だに解決に至っていない現状がある。

本稿の目的は、いじめ問題を近年新たに提出されたスクールカースト概念から紐解くことにより、いじめ問題に新たな視点を導入し、問題緩和の一助になることである。

II いじめとは何か

いじめに関する議論は様々な学問領域で行われている。また、いじめは子どもたちだけに起きる問題ではない。近年の言説に従えば、セクシャルハラスメントやパワーハラスメント、アカデミックハラスメント等もいじ

所属機関：立正大学 社会福祉学部 社会福祉学科

[連絡先] 〒360-0194 埼玉県熊谷市万吉1700
TEL：048-536-6670
E-mail：tanaka.hidekazu@ris.ac.jp

投稿受付日：2013年12月11日
掲載許可日：2014年5月23日

めとは無関係な概念ではない。

しかし本稿においては、子どもたちの福祉に関わる論考を射程とするため、子どもたちの間に生じるいじめに範囲を限定する。

いじめについて、世間の関心が高まりはじめた1985(昭和60)年に文部省(現:文部科学省)は、いじめを以下のように定義した。

1. 自分よりも弱いものに対して一方的に、2. 身体的・心理的な攻撃を継続的に加え、3. 相手が深刻な苦痛を感じているもの。4. 学校としてその事実を確認しているもの。なお、起こった場所は学校の内外を問わないこととする。

また、1995(平成7)年には、上記4の定義を「個々の行為がいじめに当たるか否かの判断を表面的・形式的に行うことなく、いじめられている児童生徒の立場に立って行う。」とした。

2006(平成18)年には、『「いじめ」とは、「当該児童生徒が、一定の人間関係のある者から、心理的、物理的な攻撃を受けたことにより、精神的な苦痛を感じているもの』と定義変更された。

これらの変化は、いじめ現象をよりいじめを受けた側に立った定義へと変更している。

さらに、2013(平成25)年に制定、施行された「いじめ防止対策推進法」にもいじめの定義づけがなされている。同法第二条においていじめが定義され、ここでは新たにインターネット行為をその範疇に加えている。

III いじめとスクールカースト

いじめに関する研究は、主に教育学や社会学の領域において行われている。内藤は、従来のいじめ論が論じる原因を、受験競争の過熱、家族の人間関係の希薄化と「愛」の欠如、学校や地域社会の共同体解体と、都市化に伴う市民社会の原理の侵入、子どもたちの人間関係の希薄化、子どもの幼児化・未熟化と耐性の欠如等にまとめている¹⁾。

上記の議論はいじめについての一般論であり、これらの議論にも魅力や課題は存在する。このような現状の中、いじめに関する研究において近年「スクールカースト」との概念が登場し、いじめ研究にも多大なる貢献が期待されている。

この用語を初めて紙面上で発表したのは、2007(平成19)年に『いじめの構造』を著した森口朗である²⁾。森口はいまだに解明されていない、いじめの仕組みを解き明かすためスクールカーストの概念を提出した。

その後、スクールカーストは2007(平成19)年に朝日

新聞社発行の雑誌『AERA』紙上にも登場した。

2012(平成24)年には、教育社会学者の鈴木翔によって『教室内カースト』が刊行された³⁾。筆者はこの比較的新しい概念であるスクールカーストが、いじめ研究に大きな貢献をするものであると考えている。そのため、ここでは鈴木を考えを詳細に検討することにより議論を進めていく。鈴木の本は、いじめ問題を直接取り扱ったものではない。しかし、同氏は、学校の教室内における見えない生徒間の権力構造を教育社会学の視点から描き出すことに成功している。

スクールカーストとは『主に中学・高校で発生する人気のヒエラルキー(階層制)。俗に「1軍、2軍、3軍」「イケメン、フツメン、キモメン(オタク)』『A、B、C』などと呼ばれるグループにクラスが分断され、グループ間交流がほとんど行われなくなる現象』を指す。

鈴木は、中学生、大学生、現役の教師に対するアンケート調査やインタビュー調査を通してスクールカーストの内実を明らかにしようと試みている。

鈴木の本の指摘にもあるように文学の世界では、以前からスクールカーストに関する描写は数多く描かれている。例えば若手作家である朝井リョウは、小説すばる新人賞を受賞した『桐嶋、部活やめるってよ』において、以下のような執筆箇所を残している。ここではスクールカーストを文学の視点から描き出している箇所を選出する。

なんで高校のクラスって、こんなにもわかりやすく人間が階層化されるんだろう。男子のトップグループ、女子のトップグループ、あとまあそれ以外。ぱっと見て、一瞬でわかってしまう。だってそういう子達って、なんだか制服の着方から持ち物から字の形やら歩き方やら喋り方やら、全部が違う気がする。何度も触りたいと思ったくしゃくしゃの茶髪は、彼がいる階層以外の男子がやっても、湿気が強いのかって感じになってしまう⁴⁾。

また、2003(平成15)年に芥川賞を受賞した綿矢りさも『蹴りたい背中』の中で、スクールカーストを描き出している。以下、その部分を引用する。

今日は実験だから、適当に座って五人で一班を作れ。先生が何の気なしにいった一言のせいで、理科室にはただならぬ緊張が走った。適当に座れと言われて、適当な場所に座る子なんて、一人もいないんだ。ごく一瞬のうちに動く緻密な計算—五人全員親しい友達で固められるか、それとも足りない分を余り者で補わなければいけないか—がなされ、友達を探し求めて泳ぐ視線同士がみるみるうちに絡み合

い、グループが編まれていく⁵⁾。

これらの文章は、スクールカーストを実に丁寧に描き出している。しかし、この内実に対し、スクールカーストという新たな概念が提出されたことは、意義あることである。その理由は、ある現象が概念として社会に提出されれば、当該事象に対して様々な研究が行われることになるからである。またそれが進展することにより、現在スクールカーストに苦しんでいる子どもたちに支援の第一歩が踏み出せることになる。

鈴木が発見したのは、以下の点である。

1. スクールカーストの認識は発達段階により変化する。
2. それぞれのカーストに所属する生徒には特徴がみられる。
3. 生徒はスクールカーストを権力と捉えているが、教師はそれを能力と考えている。

スクールカーストは小学校段階においては個人単位で把握されやすいのに対して、中学以降になるとグループ単位で把握される機会が増加する。また、スクールカースト上位の児童・生徒は、にぎやか・異性にもてる・若者文化へのコミットメントが高い・運動能力が高い等の特徴があり、逆にそれが低い生徒は、地味で特徴がないのがあえて挙げる特徴である。

さらに教師は、スクールカースト上位の生徒を能力の高い生徒であるとの認識をもっていることを鈴木は示している。この場合の能力とは、教育社会学者の本田由紀が提唱したハイパー・メリトクラシーと親和性が高い。ハイパー・メリトクラシーとは、近年「人間力」等で表現されるような尺度のはっきりしないコミュニケーション能力が重視されているものである。本田は、「人間力」等の抽象的で曖昧な概念を嫌い、社会がこの問題に無自覚であることに警笛を鳴らしている⁶⁾。また、筆者も本田の意見に賛同する立場をとる⁷⁾。

スクールカースト上位の生徒は、コミュニケーション能力や人間性に長けた人物であると教師が認識していると鈴木の研究は指摘する。逆にスクールカーストの低い生徒に対し、教師が抱く印象として、やる気がない・向上心がない・人生損している等の否定的なインタビュー結果を鈴木は掲載している。

鈴木の研究結果から言えることは、教師から生徒への理解には偏りが出る可能性があるということである。この部分は、教師自身注意すべき部分であろう。教師は意図的に「クラス団結」等の表現を使用し、クラス内をまとめようとする場面があるが、そのような言説はスクー

ルカースト上位の生徒のみにしか団結への参加を保障していないことを教師自身が自覚すべきであろうと考える。

鈴木も掲げている通り、スクールカーストは世代間に差があるのかについては今後の研究が待たれる。

また、スクールカーストの地域差に関しても今後、より検討が必要なテーマであろう。例えば、人口の少ない地域とそれが多い地域ではスクールカーストの出現に差が出るのであろうか。

以上、詳細に鈴木の研究を基に議論を進めてきた。上記の研究は、ただ単に勉強ができる・できないであるとか、地域社会が希薄化している等の漠然とした議論ではなく、「人気」に焦点をあてているところに新鮮さがある。人気の低い者は人気の高い者には逆らえない。また、人気の低い者はクラス全体に対する発言権が保障されていない。人気の高い者の発言がクラス全体の総意として通用してしまう。

人気の高い者の基準は、ハイパー・メリトクラシーが発達した現代社会において、それ以前の社会と大きく様変わりしたのではないだろうか。

上記、本田がハイパー・メリトクラシー概念を提出する以前の社会において人びとの価値観を支配していたのはメリトクラシー（業績主義）であろう。これについては、教育社会学者の竹内洋が詳細な先行研究を残している。

竹内によると、メリトクラシー概念において重視されるのは、学校における成績であった⁸⁾。この概念が人びとに広がったのは、どのような家庭に生まれても、本人が努力さえすれば、親世代からの社会移動により階層上昇することが可能であるとする思想がかつて日本社会に浸透していたからである。

しかし、時代が変化した現代においては、メリトクラシー概念はすべての子どもに通用しなくなっている。その原因として挙げられるのは、格差社会の進展、貧困の世代間連鎖等である。現代社会において、メリトクラシー概念が通用する子どもの条件は、学歴競争を戦えるだけの資金力のある親に恵まれるかどうかであろう。現代社会において、メリトクラシー概念は、以前の社会ほどには通用しなくなっているのである。

メリトクラシー概念が通用した時代であれば、学校の成績が良いことは周囲の子どもから尊敬の念を抱かされていたであろう。しかし、ハイパー・メリトクラシー概念が登場した現代社会において、学校の成績がよいことは子どもたちから尊敬を集める条件には該当しない。荻谷が指摘するように、階層の高い家庭の子どもと、それが低い子どもの家庭で「意欲格差」が進行しているという事実は、貧困が世代的再生産される可能性を示している

のである⁹⁾。

現代社会において、スクールカーストを決める要因は人気であるが、それは成績によって導かれるものではない。鈴木の実験研究が示すように、スクールカースト上位の子どもの特徴はにぎやか・異性にもてる・若者文化へのコミットメントが高い・運動能力が高い等であり、それを本田が提出する概念で捉え直せば、ハイパー・メリトクラシーの高い子どもということになる。

これは、現代社会に浸透する「空気を読む」や「KY(空気読めない)」概念とも親和性が高い。スクールカースト上位の子どもが、他者からの人気を獲得するには空気を読むことが求められる。いじめは、継続的な関わりのある集団から生じやすいが、子どもたちは、自身のクラス内において、空気を読むことにより、自身のスクールカーストを確定していく。ここで空気を読めないものは、無条件にスクールカースト下位に追いやれることとなる。

「空気を読む」とは大変抽象的な概念であるけれども、現代の子どもたちは周囲の子どもたちや親や教師が何を考え、自身がどのような行動をすることを求められているのかを考えさせられる機会(これが空気を読む機会に該当する)を数多く与えられている。これは、子ども自身の欲求と同等もしくはそれ以上に、その周囲にいる人間の気持ちや考えを先読みする必要性に迫られていると言え換えることも可能である。

またスクールカーストを決めるのは、メリトクラシー概念が浸透していた時代のように学業成績のような客観的なものではなく、容姿や笑いのセンス等、基準のはっきりしない曖昧なものである点にも注意が必要である。基準がはっきりしないと、人びとが頼るものは他者の行動である。これは上述の「空気を読む」や「KY(空気読めない)」とも共通する。このような価値観の影響が強いと、多くの者が賛同するものが正しいものとなる。それを決めるのは子ども自身の価値観ではなく、他の子どもがどのように感じているかを読めるかどうかである。ここにも空気を読むことが重要である証左がある。

本稿において検討したスクールカーストや「空気を読む」といった概念は、筆者より世代の上の人びとには理解し難いものであるかもしれない。けれども、このような概念を検討することは、次世代を担う子どもたちが不必要な傷を得ることなく発達するために必要な貢献をするのではないか。

スクールカースト概念からいじめ研究が学ぶことは、現代の子どもたちは、曖昧な価値基準の中で、盛んに空気の読みあいを行っているという現実を知ることである。

人間は、憲法によって平等が保障されていようとも現

実においては必ずしもそうではない。容姿の良い者もいれば、それが醜い者もいる。人前で笑いの取れる者もいればそれができない者もいる。空気を読むのが上手な者もいれば、それが下手な者もいる。それが人間社会であり、ソーシャルインクルージョン概念が浸透してきている現代社会においては、多様な人間がいることは望ましい社会であるとされている。

このように考えれば、スクールカーストをなくすのは難しく不可能であるともいえるし、またそうすることが望ましいとも考えない。またいじめも同様であろう。「みんな仲良くしましょう」と言っても無理である。

上記の森口は、スクールカーストを決定する最大要因はコミュニケーション能力であるとしている。また、コミュニケーション能力を「自己主張力」「共感力」「同調力」の三次元マトリクスで決定されるとし、これら三つの総合力を主因としてスクールカーストが決定されている。そして、スクールカーストが高い者ほどいじめに遭いにくく、逆にそれが低いといじめに遭いやすいとの議論を展開している¹⁰⁾。この議論は、これまで挙げてきた鈴木や本田の研究とも合致するものである。

筆者はいじめを根絶することは不可能であると考えているが、それを減らすことは可能であると思う。その方法は、いじめを発生させないような環境を整えることである。

森口も、その著書の中で、「いじめは根絶できない。いじめに関する議論や政策は、そのことを前提に行われるべき」と述べている。また、「社会にいじめが存在する限り、学校だけを『いじめ無菌状態』にすることは、子どもの発達にとって決して有益ではない」として、子ども時代に清潔すぎる環境で育まれることは、かえってその子どもの後の人生を不幸にするとしている。このような認識に立った上で森口は、以下のように問題解決策を提案している¹¹⁾。

1. 一般社会で犯罪になる行為(恐喝・強制わいせつ・障害・暴行・窃盗・器物破損等)は学校でも犯罪として扱い、教育機関としての処罰や更正は、司法機関と同時並行で行う。
2. 刑法上の罪には記載されているが一般社会ではよほどのことがない限り犯罪にならない行為(名誉毀損、侮辱等)や、そもそも犯罪ではない行為(仲間はずれ、集団での無視等)は学校の中で指導する。

これらの提案はもっともであり、筆者も賛同する立場にある。

また、内藤はいじめ問題解決のために以下の提案をし

ている¹²⁾。

1. 学校の法化（加害者が生徒である場合も教員である場合と等しく、暴力系のいじめに対しては学校内治外法権【聖域としての無法特権】を廃し、通常の市民社会と同じ基準で、法にゆだねる。）
2. 学級制度の廃止（コミュニケーション操作系のいじめに対しては学級制度を廃止する。）

また、内藤は中長期的な展望として、新しい義務教育を提唱し、その新たな義務を以下の三つに限定するとしている¹³⁾。

1. 日本社会で生活していくのに必要最低限の知識を習得しているかどうかをチェックする国家試験を子どもに受けさせる保護者の義務
2. 国家試験に落ち続けた場合には、教育チケット（教育のみに利用できる特殊貨幣）を消化させる保護者の義務
3. 国が国家試験を行い、またさまざまな学習サポート団体や教材を利用するためのチケットを国や地方公共団体に配る義務

これらの議論は、神聖化されている学校に異議を唱えるものとして評価できる。いじめやスクールカーストは必ず生じるのであるから、それらをすべて排除するのではなく有効活用し、学校は子どもが社会を生き抜くための最低限の知識や技術を身につけさせる役割に特化させていく必要があるだろう。しかし、この議論を進めるためには社会制度を根本から改革する必要性に迫られることになる。まずは、スクールカーストに関する研究を進展させ、いじめ問題を緩和していくことが望ましいであろう。いじめ問題の緩和に向けたひとつの手法としてソーシャルワークの活用がある。次項ではいじめ問題と学校分野のソーシャルワークであるスクールソーシャルワークの連関について考察を進める。

IV いじめとスクールソーシャルワーク

近年、社会福祉領域ではスクールソーシャルワークが注目を集めている。スクールソーシャルワークとは、学校場で実践されるソーシャルワークの一分野である。日本では、1986（昭和61）年に埼玉県所沢市で山下英三郎によって行われた活動がスクールソーシャルワークの始まりであるとされている¹⁴⁾。久保は、日本におけるスクールソーシャルワークについて、以下のように説明している¹⁵⁾。

わが国では、まずスクールカウンセラー、教育相談員が学校や教育委員会に配置されたが、近年、各地でスクールソーシャルワーク実践が先駆的に行われるようになった。そうしたなか、2008年度から文部科学省が「スクールソーシャルワーカー活用事業」を開始した。児童・生徒の不登校、校内暴力、いじめ、自殺、家族の殺傷などが社会問題になっている今日、学校と家庭・地域社会との調整を図り、それらの連携によって児童・生徒が生き生きと生活し、学ぶことができるように援助していくソーシャルワーク機能が教育現場に定着していくことが期待される。

スクールソーシャルワークは日本社会には十分に定着していないものの、本稿で取り上げたいじめ問題の解決には必要不可欠なものである。

大塚は、いじめ問題同様に教育現場において問題が顕在化している学級崩壊についても、その背景にはクラス内にいじめがあることを明らかにしている¹⁶⁾。いじめ問題の背景には本稿で取り上げた問題以外にも貧困や親の雇用不安定化など、個人の要因ではなく社会環境の問題が影響を与えている。ソーシャルワークは、このような問題に対し、人間と社会環境の接点に介入し調整し方向付け、問題解決を図る役割を期待されている。

岩崎は、「今や必要な支援とは、心理面のケアだけでなく、問題の要因は子どもを取り巻く環境にもあることにも目を向け、家族や周囲の人々、学校組織、地域の関係機関、果ては教育制度にも働きかけて包括的に問題解決に取り組むことである。」とし、スクールソーシャルワークの必要性を訴えている¹⁷⁾。

このように、スクールソーシャルワークが学校に導入されることは、いじめ問題をはじめとする子どもの問題に、新たな視点を提供し問題解決の一助となることであろう。

本稿との関連でスクールソーシャルワークの機能を具体的に考察すると、スクールソーシャルワーカーがスクールカーストの低い子どもたちに対して、個別的な受容を基本として丁寧なソーシャルスキルを教える場を設けることが考えられる。スクールカーストの低い子どもたちは、負の連鎖により自身が社会性を身につける機会を奪われやすい。そのような場合、現在の学校制度においては、それを個性として放置してしまいがちである。また、それはいじめの温床を放置することにも繋がる。

スクールカーストが低い子どもたちもいずれは社会に出ていくのであるから、社会の中で通用する社会性（あいさつや身だしなみ、自分の意見をしっかりと述べること等）は発達過程の中で身につけなければならない。ス

クールソーシャルワーカーが、その手助けをすることにより、より社会性のある子どもたちが育つ。本稿はスクールカースト論からいじめ問題の理解を試みるものであるが、スクールソーシャルワーカーが上述の支援を行うことにより、子ども個人の発達といじめの予防に寄与することができると思う。

V 結論

本稿では、いじめ問題に関連した概念であるスクールカーストについて詳細に検討を加えた。今日では、コミュニケーション能力や容姿、笑いのセンス等が、これまでのメリトクラシーに代わって重要な位置を占めるようになっており、それがスクールカーストの上下を決める大きな要素となる。またスクールカーストの議論は、「人間力」等で表現されるハイパー・メリトクラシー概念とも親和性が高いことを明らかにした。

しかしこのようなことは人間に個性がある以上、解消されることはないし、それが良いとも筆者は考えない。現実問題としてスクールカーストが存在する以上、そこからの改善策を考えるべきである。

いじめ問題を解決するには、いじめと犯罪の区別をつける必要がある。また、学校は人間が社会において生きていくための知識や技術を教える場として機能させる必要がある。もちろん、学校生活において社会性を身につけることは必要である。さらに、これまでの神聖化された学校観を改める必要があるだろう。

また、いじめ問題の背景には社会環境要因が存在し、その解決にはスクールソーシャルワークをはじめとする社会福祉の専門知識を備えた教職員の配置を進展させることが必要である。いじめ問題は教員だけで解決できる問題ではない。当該児童を取り巻く社会環境への配慮が欠かせない以上、このような問題に対しソーシャルワークをはじめとする専門知識をもつ教職員は必要不可欠な存在である。

文献

- 1) 内藤朝雄：いじめの社会理論—その生態学的秩序の生成と解体。柏書房。東京。47-49。2001。
- 2) 森口朗：いじめの構造。新潮新書。東京。2007。
- 3) 鈴木翔：^{スクール}教室カースト。光文社新書。東京。2012。
- 4) 朝井リョウ：桐島、部活やめるってよ。集英社文庫。東京。64。2012。
- 5) 綿矢りさ：蹴りたい背中。河出文庫。東京。8-9。2007。
- 6) 本田由紀：多元化する「能力」と日本社会—ハイパー・メリトクラシー化のなかで。NTT出版。東京。2005。
- 7) 田中秀和：本田由紀が捉える現代の教育と社会—教育社会学の先行研究から学ぶもの。新潟医療福祉会誌12(2)：80-87。2012。
- 8) 竹内洋：日本のメリトクラシー—構造と心性—。東京大学出版会。1995。
- 9) 荻谷剛彦：階層化日本と教育危機—不平等再生産から意欲格差社会へ—。有信堂。東京。2001。
- 10) 森口朗：前掲2)。28-60。
- 11) 森口朗：前掲2)。156-187。
- 12) 内藤朝雄：いじめの構造—なぜ人が怪物になるのか。講談社現代新書。東京。199。2009。
- 13) 内藤朝雄：前掲1) 277。
- 14) 大塚美和子：日本のスクールソーシャルワークの流れ。山野則子・峯本耕治編 スクールソーシャルワークの可能性—学校と福祉が協働・大阪からの発信。ミネルヴァ書房。京都。35。2007。
- 15) 久保美紀：スクールソーシャルワーク。山縣文治・柏女霊峰編 社会福祉用語辞典(第8版)。ミネルヴァ書房。京都。216-217。2010。
- 16) 大塚美和子：学級崩壊とスクールソーシャルワーク—親と教師への調査に基づく実践モデル。相川書房。東京。19。2008。
- 17) 岩崎久志：ソーシャルワークと学校教育。西尾祐吾・橘高通泰・熊谷忠和編 ソーシャルワークの固有性を問う—その日本の展開を目指して。晃洋書房。京都。38。2005。